

## Web 方式による授業アンケートのパイロット版についての報告

### A brief report on the result of a pilot version of a web-based evaluation survey by students

関口理久子（関西大学社会学部）

キーワード 授業評価アンケート、Web 方式、学修態度への自己評価／evaluation survey by students, web-based, self-evaluation on learning attitude

#### 1. 授業評価アンケートの改正の背景

関西大学では、2017年2月に、教育における内部質保証システム（教育の主体が自らの教育のあり方を学生の学修成果を基にチェックする仕組み）を構築した。その背景には、高等教育の質保証がグローバル化の進行とともに国際共通課題となっており、学修成果をどのようにあげるかが問われるようになってきたことがある。

教育における内部質保証システムでは、3つのレベルにおいて Plan (P)、Do (D)、Check (C)、A (Action) の PDCA サイクルの有機的な連携が重要となる。3つのレベルとは、授業を基盤とするマイクロレベル、授業の集合体である教育プログラム（学士課程教育を含む）を基盤とするミドルレベル、そして学士課程教育および全学共通の教育プログラムの集合体を基盤とするマクロレベルである。それぞれのレベルに PDCA サイクルがあるが、授業アンケートは、マイクロレベル（授業）において、客観的評価である成績評価に、主観的評価である授業アンケートを加えることで、C (Check) の多面性を担保するものである。

#### 2. 授業評価アンケートの見直しの必要性

関西大学では、より質の高い教育を行うためには、直接学生の声を聞き授業に反映させることが必要であるとの認識に立って 2000 年度から試行的に授業評価アンケートが開始され、2010 年度まで細かな改良が加えられながらアンケートが実施されてきた。2011 年度春学期には、アンケートの質問項目の変更、教員への「フィードバックシート」の返却、教員版授業評価アンケートの実施等の見直しが行われ、個々の授業改善につなげる

アンケートとして定着してきた（三浦, 2000; 川瀬・竹中, 2000）。

しかし、先述したように、現行のアンケートにおいて不足している点があることが明らかになり、それに伴って更なる改善が必要なが判明した。

改善点として考えられた点は主に二つである。

第一に、学生自身がどの程度学べたかを自ら評価する主観的評価に関わる項目、すなわち、学修態度への自己評価項目が少ないという点である。現行のアンケートは、教員の態度への評価や学習環境への評価について尋ねる項目は多く、教授法への評価としては役立つものである。しかし、学生の授業以外での主体的な学修時間や、シラバス等に示した到達目標にどのくらい達したと感じているか、授業の内容をどのくらい理解したと感じているかなどの、学生自身が自分の学びを評価する項目を追加する必要がある。

第二に、質問項目について学部が自由に作成することができないという点である。現行のアンケートは、全学共通の項目のみで構成されている。共通項目だけでは尋ねきれない点について学部独自で項目を作成したいというニーズには、現行のマークシート方式によるアンケートでは応えられていない。そこで、共通項目に学部独自項目も加えたいというニーズにも応えられるように実施方法を改善する必要がある。以上のような背景から、現行の授業評価アンケートの見直しを行うことが必要となった。

#### 3. 新しいアンケートの提案

教育開発支援センター（CTL）では、各学部選出の教育開発支援センター（CTL）委員を中心に

各学部の協力を得て、2018年10月から改善案を作成してきた。改善案については、2019年3月にCTL委員会にて全学的に提案の骨子が了承され、名称も「授業アンケート」と変え、新たなアンケートとして実施されることとなった。その後、2019年4月には教育推進委員会にて報告され、2019年10月には、詳細な実施案が全学的に提示され了承された。新アンケートの主な改善点は、学生自身が自分の学びについて評価する項目が加えられたこと、マークシート方式からWeb方式に変更され、学部独自科目の作成や担任者への結果の迅速なフィードバックが可能になったこと、全開講科目について実施されることなどである(表1)。

表1 授業評価アンケート(現行)と授業アンケート(新)の新旧対応について

区分	授業評価アンケート (現行アンケート)	授業アンケート (新アンケート)
趣旨・目的	授業改善	授業改善と内部質保証に対応させた学修評価
対象科目	全開講科目(専門教育科目の演習科目・実習科目は一部除く)	全開講科目
アンケートの種類	中間アンケート・最終アンケート	最終アンケート(中間アンケートは希望があれば実施)
調査方法	マークシート・自由記述	WEB方式・自由記述用紙
実施期間	第14～第15週目	第13週目～各学期試験最終日まで
実施時間	授業中	原則授業中だが、授業外も可
項目数	共通質問19問と担任者提示項目1問	共通質問9問と担任者提示項目1問・学部独自項目最大5問
記録方法	無記名	無記名
質問内容	教授評価項目	教授評価項目と学修評価項目
教員アンケート	実施	実施しない
結果の閲覧(教員)	インフォメーションシステムより集計結果とフィードバックシートを返却	集計結果をデータとしてフィードバック・担任者によるクロス集計が可能
結果の閲覧(学生)	シラバスより集計結果を閲覧	シラバスより集計結果を閲覧

#### 4. パイロット版の実施

新アンケートの実施に向けては、全学からCTL委員を通じていくつかの懸念が寄せられた。特に、

回答率の低下、QRコードの提示方法、およびスマートフォンを活用した回答の際にKuWifiへの過負荷が生じる懸念などがあった。また、現行の授業評価アンケート項目にあった項目のうち新しいアンケート項目では削除される項目があり、削除された項目の代替え項目となりうる項目が新アンケートにあるかどうかの確認が必要となった(付表1、付表2)。そこで、2020年度春学期からの円滑な実施にむけて、2019年度秋学期にパイロット版を実施することが必要となった。

#### 4.1. 実施方法

**実施対象科目** 13学部の専門科目と共通教養科目のうち、CTL委員の担当する授業科目において、現行アンケートと新アンケートの両方を実施する科目と新アンケートのみを実施する科目について担任者の判断によりいずれかを実施した。現行アンケートと新アンケートの両方を実施した科目は30科目(表2-1)、新アンケートのみを実施した科目は46科目であった(表2-2)。

**実施方法** 授業中に、QRコード、URLを付けた自由記述用紙を一人につき1枚配付した。回答者は、自由記述用紙に付されたQRコードを読み取り、アンケートに回答した。また、担任者の指示のもと自由記述用紙を記入の上、担任者に提出し、担任者は自由記述用紙を回収した。なお、自由記述用紙には従来通り所属、学籍番号、氏名の記述欄を設けた。回答時にスマートフォンやPCといったデバイスを持っていない受講生に対しては、QRコードとURLを付した自由記述用紙を持ち帰り、期日までに回答するよう指示することとした。

**担任者提示項目(Q10)** パイロット版に限り、第10項目は、「このアンケートシステムで工夫してほしいと思うものをすべて選んでください」とし、選択肢は、画面の表示(見やすさ)、画面表示までの時間、KuWifiのつながりやすさ、回答に要した時間(質問数)、特にないの計5選択肢であった。

表 2-1 両アンケート実施科目の授業形態別一覧

学部	授業形態 <sup>a)</sup>				合計
	I型	II型	III型	IV型	
商学部	1	0	0	0	1
社会学部	2	0	0	0	2
政策創造	1	0	0	0	1
外国語	0	0	0	1	1
社会安全	2	0	0	0	2
総合情報	1	0	0	0	1
人間健康	1	0	0	0	1
環境都市	0	1	0	0	1
化学生命	3	0	0	0	3
共通教養	4	0	8	3	15
その他	2	0	0	0	2
合計	17	1	8	4	30

Note.<sup>a)</sup>科目数は30で授業形態により4型に分類した。講義(I型): 専門教育および共通教養の講義科目。専門教育演習(II型): 各学部の専門演習か卒業研究。共通教養演習(III型): 共通教養科目のうち演習型授業科目。外国語科目(IV型)。

表 2-2 新アンケート実施科目の授業形態別一覧

学部	授業形態 <sup>a)</sup>					合計
	I型	II型	III型	IV型	V型	
法	0	2	0	0	0	2
経済	1	1	0	0	0	2
商	1	0	0	0	0	1
社会	2	2	0	0	1	5
政策創造	1	1	0	0	0	2
外国語	0	1	0	1	0	2
社会安全	2	2	0	0	0	4
総合情報	1	1	0	0	0	2
人間健康	1	2	0	0	0	3
環境都市	0	1	0	0	0	1
化学生命	3	0	0	0	0	3
共通教養	4	0	9	3	0	16
その他	3	0	0	0	0	3
合計	19	13	9	4	1	46

Note.<sup>a)</sup>科目数は46で授業形態により5型に分類した。講義(I型): 専門教育および共通教養の講義科目。専門教育演習(II型): 各学部の専門演習か卒業研究。共通教養演習(III型): 共通教養科目のうち演習型授業科目。外国語科目(IV型)。専門教育実習型(V型)。

4.2. 結果

回答率 履修者数は2563名、回答者数は1568

名であり、回答率は61.2%であった。

**記述統計量** 共通項目についての平均値と標準偏差を表3に示した。

**担任者提示項目(Q10)** 選択された項目別の人数と比率を示すと、特にないが最も多く812名(55.8%)、次いでKuWifiのつながりやすさが385名(26.5%)、画面の表示が178名(12.2%)、画面表示までの時間が106名(7.3%)、回答に要した時間が65名(4.5%)の順であった。

**新アンケートの項目間相関** 新アンケートを実施した46科目について、新アンケートの項目のうちQ5の多肢選択項目とQ10の担任者提示項目を除く8項目間について、ピアソン積率相関係数を算出した(表4)。Q6.学修時間はQ3.シラバスとの整合性とのみ中程度の正の相関が認められた( $p<.05$ )が、他のいずれの項目とも相関が認められなかった。その他の項目間ではQ6以外のすべての項目と中程度から強い正の相関が認められた( $p<.01\sim.001$ )。

**現行アンケートと新アンケートの項目間相関** 現行および新アンケートの両方を行った30科目について、現行アンケートのQ3とQ15の多肢選択項目とQ20.担任者提示項目を除く17項目と、新アンケートの8項目について、ピアソン積率相関係数を算出した(表5)。新アンケートのQ6.学修時間は、すべての現行アンケート項目と相関が認められなかった。また、Q7.意欲的学びはQ1.出席を除くすべての現行アンケート項目と中程度から強い正の相関が認められた( $p<.05\sim.001$ )。

**履修者数・回答数と新アンケートの項目間相関** 履修者数と回答数と新アンケートの各項目間のピアソン積率相関係数を算出した(表6)。履修者数と回答者数は、Q4.理解度確認、Q6.学習時間、Q7.意欲的学び、Q8.到達目標の達成度、Q9.総合判断と中程度の負の相関が認められた( $p<.01\sim.001$ )。

表3 授業評価アンケート（現行アンケート）と授業アンケート（新アンケート）の記述統計量

項目番号	区分	平均	SD
現行アンケート（30科目）			
Q1	出席	4.51	0.25
Q2	意欲的学び	4.39	0.26
Q4	授業時刻の遵守	4.49	0.22
Q5	授業テーマ	4.46	0.25
Q6	教材の適切さ	4.30	0.34
Q7	話し方	4.29	0.40
Q8	質問・相談の配慮	4.35	0.41
Q9	教員の公平性	4.47	0.30
Q10	学習環境の保持	4.48	0.29
Q11	教員の熱意	4.42	0.31
Q12	授業を進め方	4.34	0.33
Q13	授業の進度	4.32	0.29
Q14	授業の難易度	4.16	0.33
Q16	知的好奇心の刺激	4.24	0.36
Q17	推薦できる内容	4.26	0.37
Q18	知識・能力の高まり	4.28	0.32
Q19	総合的判断	4.31	0.33
新アンケート（46科目）			
Q1	進度	4.58	0.42
Q2	難易度	4.17	0.53
Q3	シラバスとの整合性	4.36	0.39
Q4	理解度確認	4.37	0.53
Q6	学修時間	2.55	1.01
Q7	意欲的学び	4.34	0.38
Q8	到達目標の達成度	4.07	0.41
Q9	総合判断	4.46	0.40

表4 授業アンケート（新アンケート）の項目間の相関分析結果

質問番号と質問項目	Q1	Q2	Q3	Q4	Q6	Q7	Q8
Q1 進度	-						
Q2 難易度	.59 ***	-					
Q3 シラバスとの整合性	.59 ***	.51 **	-				
Q4 理解度確認	.43 **	.59 ***	.63 ***	-			
Q6 学修時間	.19	.03	.32 *	.18	-		
Q7 意欲的学び	.41 **	.50 **	.48 **	.79 **	.21	-	
Q8 到達目標の達成度	.42 **	.62 ***	.56 **	.75 **	.18	.88 ***	-
Q9 総合判断	.57 ***	.59 ***	.72 ***	.87 **	.27	.88 ***	.81 ***

Note. N=46; \*p<.05; \*\*p<.01; \*\*\*p<.001

表5 新アンケートと現行アンケートの項目間相関分析の結果

	新アンケート								
	Q1	Q2	Q3	Q4	Q6	Q7	Q8	Q9	
現行アンケート									
Q1 出席 <sup>a)</sup>	-.20	-.11	.00	.12	-.29	.19	.21	.06	
Q2 意欲的学び	-.02	.15	.03	.50 **	-.28	.59 **	.57 **	.38 *	
Q4 授業時刻遵守 <sup>b)</sup>	.13	.22	.32	.41 *	-.11	.38 *	.24	.31	
Q5 テーマ明確 <sup>b)</sup>	.15	.17	.60 ***	.53 **	.07	.45 *	.37 *	.55 **	
Q6 教材活用 <sup>b)</sup>	.22	.29	.56 **	.69 ***	-.14	.58 **	.46 *	.65 ***	
Q7 話し方 <sup>b)</sup>	.25	.42 *	.62 ***	.87 ***	-.13	.71 ***	.64 ***	.82 ***	
Q8 質問・相談の配慮 <sup>b)</sup>	.16	.45 *	.48 *	.89 ***	-.10	.73 ***	.65 ***	.77 ***	
Q9 教員の公平性 <sup>b)</sup>	.05	.33	.44 *	.80 ***	-.05	.61 ***	.51 **	.70 ***	
Q10 学習環境の保持 <sup>b)</sup>	.09	.37 *	.36	.75 ***	-.29	.58 **	.53 **	.63 ***	
Q11 教員の熱意 <sup>b)</sup>	.15	.37 *	.41	.84 ***	-.16	.65 ***	.57 **	.71 ***	
Q12 授業を進め方 <sup>b)</sup>	.19	.42 *	.49 **	.90 ***	-.12	.74 ***	.66 ***	.78 ***	
Q13 授業の進度	.41 *	.59 **	.55 **	.76 ***	-.21	.73 ***	.65 ***	.79 ***	
Q14 授業の難易度	.50 **	.76 ***	.50 **	.64 ***	-.30	.66 ***	.68 ***	.68 ***	
Q16 知的好奇心の刺激 <sup>b)</sup>	.14	.38 *	.44 *	.82 ***	-.10	.71 ***	.68 ***	.79 ***	
Q17 他者への推薦 <sup>a)</sup>	.28	.46 *	.53 **	.81 ***	-.25	.76 ***	.70 ***	.82 ***	
Q18 <sup>a)</sup>	.13	.32	.52 **	.81 ***	-.12	.64 ***	.58 **	.74 ***	
Q19 総合的判断	.15	.36	.57 *	.84 ***	-.15	.69 ***	.64 ***	.80 ***	

Note. N=30; \*p<.05; \*\*p<.01; \*\*\*p<.001; <sup>a)</sup>新アンケートでは対応する項目がない; <sup>b)</sup>教員の評価に関する項目であり、新アンケートでは対応する項目がない。

表6 授業アンケート（新アンケート）の各項目と履修者数・回答者数との相関

項目番号	区分	履修者数	回答者数
Q1	進度	-.04	-.03
Q2	難易度	-.21	-.16
Q3	シラバスとの整合性	-.15	-.13
Q4	理解度確認	-.48 **	-.43 **
Q6	学修時間	-.11	-.06
Q7	意欲的学び	-.51 ***	-.43 **
Q8	到達目標の達成度	-.44 **	-.39 **
Q9	総合判断	-.46 **	-.40 **

Note. N=46; \*\*p<.01; \*\*\*p<.001

**新アンケート項目と現行アンケート項目の関連** 現行アンケートの各項目について、新アンケートの項目から予測が可能かどうかについて、重回帰分析（ステップワイズ法）により検討を行った。独立変数（説明変数）を新アンケートの項目とし、従属変数を現行アンケートの項目として重回帰分析を行った。ただし、相関分析の結果から、新アンケートの項目間には強い相関が認められる項目が多く、多重共線性のおそれがあるため、独立変数としたのは、すべてに相関が認められたQ7.意欲的学び、現行アンケートにはない項目であるQ3.シラバスとの整合性、Q3以外に相関が認められなかったQ6.学修時間、新アンケートのいくつかの項目に相関が認められた履修者数

の4つとした。その結果、Q6.学修時間はいずれの項目も有意に予測しなかった(表7)。Q7.意欲的学びは、現行アンケートのQ1.出席とQ5.テーマの明確さ以外はすべての項目を有意に予測した( $p<.05\sim.001$ )。履修者数は、多いほど現行アンケートのQ2.意欲的学びのなさについて有意に予測する結果となった( $p<.001$ )。またQ3.シラバスとの整合性については、現行アンケートのQ5.テーマの明確さ、Q6.教材活用、Q7.話し方を有意に予測する結果となった( $p<.05\sim.001$ )。

表7 重回帰分析の結果

現行アンケートの質問項目 (従属変数)	新アンケートの項目 (独立変数)			
	$R^2$	標準化係数 (B)		
		履修者数	Q3 シラバスとの整合性	Q7 意欲的学び
Q2 意欲的学び	.46 ***	-.37 *	-	.43 *
Q4 授業時刻遵守	.14 *	-	-	.38 *
Q5 テーマ明確	.36 ***	-	.60 ***	-
Q6 教材活用	.44 ***	-	.36 *	.40 *
Q7 話し方	.60 ***	-	.36 *	.54 **
Q8 質問・相談の配慮	.53 ***	-	-	.73 ***
Q9 教員の公平性	.37 ***	-	-	.61 ***
Q10 学習環境の保持	.34 **	-	-	.58 **
Q11 教員の熱意	.42 ***	-	-	.65 ***
Q12 授業を進め方	.55 ***	-	-	.74 ***
Q13 授業の進度	.54 ***	-	-	.73 ***
Q14 授業の難易度	.43 ***	-	-	.66 ***
Q16 知的好奇心刺激	.51 ***	-	-	.71 ***
Q17 他者への推薦	.58 ***	-	-	.76 ***
Q18 知識・能力の高まり	.40 ***	-	-	.64 ***
Q19 総合的判断	.48 ***	-	-	.69 ***

Note. \*  $p<.05$ ; \*\*  $p<.01$ ; \*\*\*  $p<.001$

**科目の履修者数との関連** 科目の履修者数と新アンケートの項目間に相関が認められたことから、科目の履修サイズを独立変数とし、新アンケートの各項目の平均評価値に影響があるかどうかを検討した。新アンケートを実施した46科目のうち実習1科目を除く履修者数は、最小6名から最大305名であった。履修者数について上位・下位25%境界値を算出したところ、それぞれ75名と15名、中央値は27名であった。そこで、履修者サイズにより3群に分類し、小( $N=13$ )

科目): 5-16名、中( $N=21$  科目): 16-75名、大( $N=11$  科目): 75-305名の3群を作成し、履修サイズ(3)を独立変数、各項目の平均値を従属変数とする1要因参加者間計画の分散分析を行った。主効果が有意な際の多重比較はTukey HSDにより行った。分析の結果、履修サイズの主効果有意であったのは、Q4.理解度確認

( $F(2,42)=5.90, p<.01, \eta^2=.22$ )、Q6.学修時間( $F(2,42)=5.78, p<.01, \eta^2=.22$ )、Q7.意欲的学び( $F(2,42)=10.10, p<.001, \eta^2=.32$ )、Q8.到達目標の達成度( $F(2,42)=6.67, p<.01, \eta^2=.24$ )、Q9.総合判断( $F(2,42)=5.28, p<.01, \eta^2=.20$ )であった。多重比較の結果をまとめると、すべてに共通しているのは、履修サイズが大きい科目では評価値が低いことであった(表8)。

表8 履修サイズによる評価値への影響

項目番号	区分	新アンケート項目						多重比較 <sup>b)</sup>
		履修者サイズ <sup>a)</sup>						
		小		中		大		
平均	SD	平均	SD	平均	SD			
Q1 進度		4.59	0.43	4.57	0.51	4.59	0.20	-
Q2 難易度		4.37	0.49	4.18	0.59	4.00	0.35	-
Q3 シラバスとの整合性		4.45	0.43	4.35	0.43	4.26	0.25	-
Q4 理解度確認		4.63	0.44	4.43	0.55	3.96	0.40	大<中,小
Q6 学修時間		3.17	1.22	2.17	0.69	2.30	0.59	大,中<小
Q7 意欲的学び		4.49	0.27	4.43	0.37	3.95	0.27	大<中,小
Q8 到達目標の達成度		4.22	0.31	4.16	0.45	3.72	0.25	大<中,小
Q9 総合判断		4.64	0.31	4.49	0.43	4.16	0.28	大<中,小

Note. <sup>a)</sup>履修者により3群に分類した。小( $N=13$ ): 5-16名、中( $N=21$ ): 16-75名、大( $N=11$ ): 75-305名; <sup>b)</sup>Tukey HSD

**授業形態による評価値への影響** 新アンケートを実施した46科目のうち実習1科目を除く45科目について、授業形態により4型に分類した。専門教育および共通教養の講義は講義型(I型,  $N=19$ )、各学部の専門演習や卒業研究は専門演習型(II型,  $N=13$ )、共通教養の演習型の科目は共通教養演習型(III型,  $N=9$ )、および外国語科目(IV型,  $N=4$ )であった。授業形態(4)を独立変数、各項目の平均値を従属変数とする1要因参加者間計画の分散分析を行った。主効果が有意な際の多重比較はTukey HSDにより行った。分析の結果、授業形態の主効果が有意であったのは、Q4.理解度確認( $F(3,41)=5.75, p<.01$ ,

$pr^2=.30$ )、Q6.学修時間 ( $F(3,41)=5.92, p<.01, pr^2=.30$ )、Q7.意欲的学び ( $F(3,41)=5.31, p<.01, pr^2=.28$ )、Q8.到達目標の達成度 ( $F(3,41)=3.21, p<.05, pr^2=.19$ )、Q9.総合判断 ( $F(3,41)=3.54, p<.05, pr^2=.21$ ) であった。Q8は多重比較において有意な差が認められなかった。

その他の多重比較の結果をまとめると、すべてに共通しているのは、講義型科目の評価値が低いことであった。また、専門教育演習科目型 (I型) 科目は、学修時間において有意に評価値が高かった (表9)。

表9 授業形態による評価値への影響

新アンケート項目		授業形態 <sup>a)</sup>								
項目番号	区分	I型		II型		III型		IV型		多重比較 <sup>b)</sup>
		平均	SD	平均	SD	平均	SD	平均	SD	
Q1	進度	4.64	0.31	4.55	0.61	4.44	0.39	4.77	0.14	—
Q2	難易度	4.08	0.47	4.24	0.72	4.23	0.33	4.46	0.29	—
Q3	シラバスとの整合性	4.29	0.25	4.44	0.51	4.20	0.42	4.73	0.11	—
Q4	理解度確認	4.05	0.47	4.58	0.58	4.52	0.34	4.88	0.09	I<II, III, IV
Q6	学修時間	2.08	0.63	3.28	1.05	2.24	0.94	2.42	0.15	I<III, IV<II
Q7	意欲的学び	4.10	0.38	4.52	0.34	4.42	0.27	4.60	0.23	I<II, IV
Q8	到達目標の達成度	3.87	0.39	4.20	0.46	4.19	0.29	4.35	0.28	n.s.
Q9	総合判断	4.25	0.38	4.64	0.43	4.50	0.30	4.68	0.20	I<II

Note. <sup>a)</sup>授業形態により4型に分類した。講義(I型, N=19): 専門教育および共通教養の講義科目。専門教育演習(II型, N=13): 各学部の専門演習と卒業研究。共通教養演習(III型, N=9): 共通教養科目のうち演習型授業科目。外国語科目(IV型, N=4); <sup>b)</sup>Tukey HSD; n.s.: non-significant

#### 4.3. まとめ

本稿では、2020年度より実施される授業アンケート (新アンケート) のパイロット版についての報告を行った。

分析の結果をまとめると以下ようになる。

第一に、新アンケートの項目間相関から、Q7.意欲的学びはすべての項目と相関が高く、Q6.学修時間はQ3.シラバスとの整合性以外とは相関が示されなかった。Q7.意欲的学びの項目は、現行アンケートのテーマの明確さ以外の項目とも相関が示され、重回帰分析の結果からもわかるように、現行アンケートで測定されていた多くの項目を予測することから、削除された項目の代替項目となりうることを示された。

第二に、新たに追加した項目であるQ6.学修時間は、他の新アンケート項目と相関は示されなかったが、授業形態から強く影響を受けており、講義

型では少なく、専門演習型では多いことが示された。以前より日本の大学生の学修時間は低いこと (文部科学省, 2012)、教育の質向上のためには学生の主体的な学修時間の増加が必要である (中央教育審議会, 2012) と指摘されてきた。授業アンケート (新アンケート) において学修時間についての質問項目を加えたことで、本学でも同様の傾向が認められた。さらに、授業形態による差異が明らかになった。専門演習型の授業では、学修時間が他の授業形態より多く、逆に講義型の科目では学修時間が少ないことが明らかになった。特に講義科目における授業の工夫により、学修時間が上昇する可能性が考えられる。

第三に、授業形態に関わりなく履修者数が大きい場合は、学修時間、理解度確認、意欲的学び、到達目標の達成度、総合判断の評価値が低下することが示された。

最後に、アンケートの実施に向けての懸念のうち、回答率の低下については、マークシート版と変わらない回答率を維持できることが示された。これは、今回のパイロット版の実施が授業内で行われることが多く、授業内での実施による回答率の上昇 (田岡・渡邊, 2014) が考えられる。正規の実施の際には、授業外のアンケート実施もあることが予想されるため、授業内実施以外に今後も回答率の低下を防ぐ工夫が必要であろう。

QRコードの提示方法およびスマートフォンを活用した回答の際にWifiへの過負荷への懸念については、パイロット版とは規模が異なることから、今回の結果から保証できるものではないが、実施方法については概ね支障なく実施された。また、現行の授業評価アンケート項目にあった項目のうち新しいアンケート項目では削除される項目があり、削除された項目の代替項目となりうる項目が新アンケートにあるかどうかの確認については上述したように、新アンケートになっても今まで得られていたのと同様もしくはそれ以上の情報量が確保できることが示された。以上より2020年度の実施に向けてのパイロット版からも

FDに活用できる重要な結果が得られたが、春秋学期の新アンケートの本格的実施後には、再び分析を行い、検証を行う必要があると考える。

### 参考文献

- 川瀬友太・竹中喜一（2012） 「2011年度春学期アンケートの分析と課題」 『関西大学高等教育研究』 3, 95-104.
- 三浦真琴（2012） 「進化する授業評価－リファインの試み－」 『関西大学高等教育研究』 3, 13-30.
- 文部科学省（2012） 「学生の学修時間の現状 - 文部科学省」 ([https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo4/siryo/attach/\\_icsFiles/afieldfile/2012/07/27/1323908\\_2.pdf](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/siryo/attach/_icsFiles/afieldfile/2012/07/27/1323908_2.pdf)) (2020年2月20日)
- 田岡智志・渡邊敏正（2014） 「Webシステムによる学生授業評価アンケートの実施方法とその検証」 『電子情報通信学会誌』 J-97-D(5), 1024-1034.
- 中央教育審議会（2012） 「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて－生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ－（答申）」 ([https://www.mext.go.jp/component/b\\_menu/shingi/toushin/\\_icsFiles/afieldfile/2012/10/04/1325048\\_1.pdf](https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2012/10/04/1325048_1.pdf)) (2020年2月20日)

### 謝辞

貴重な時間を費やし熱心に議論して授業アンケートの実施案を作成していただき、またパイロット版の実施にご尽力いただいた CTL 委員の皆様と CTL 事務局の皆様（付表3）に深く感謝いたします。

付表1 授業評価アンケート(現行アンケート) の質問項目(Q1~Q20)と選択肢

項目番号	区分	質問項目と選択肢
Q1	出席	わたしはこの授業によく出席していた。 ①全くそう思わない ②そう思わない ③どちらとも言えない ④そう思う ⑤強くそう思う
Q2	意欲的学び	わたしはこの授業に意欲的に取り組んだ。 ①全くそう思わない ②そう思わない ③どちらとも言えない ④そう思う ⑤強くそう思う
Q3	履修動機	この授業を履修した動機をすべて選んでください。(複数選択) ① 専門性を高めたい ②自分の興味・関心と合致した ③友人が履修した ④授業内容に魅力を感じた ⑤教員に惹かれた ⑥時間割の都合 ⑦必修科目だった ⑧授業名に惹かれた ⑨その他
Q4	時間遵守	教員は授業の開始・終了時刻を守ろうとしていた。 ①全くそう思わない ②そう思わない ③どちらとも言えない ④そう思う ⑤強くそう思う
Q5	テーマ明確	毎回の授業テーマは明確に示されていた。 ①全くそう思わない ②そう思わない ③どちらとも言えない ④そう思う ⑤強くそう思う
Q6	教材活用	教材の使い方は適切であった。 ①全くそう思わない ②そう思わない ③どちらとも言えない ④そう思う ⑤強くそう思う
Q7	話し方	理解しやすい話し方であった。 ①全くそう思わない ②そう思わない ③どちらとも言えない ④そう思う ⑤強くそう思う
Q8	質問・相談の配慮	質問や相談が出来るように配慮されていた。 ①全くそう思わない ②そう思わない ③どちらとも言えない ④そう思う ⑤強くそう思う
Q9	教員の公平性	教員は受講生に対して公平に接していた。 ①全くそう思わない ②そう思わない ③どちらとも言えない ④そう思う ⑤強くそう思う
Q10	学習環境の保持	教室内の学習環境は適切に保たれていた。 ①全くそう思わない ②そう思わない ③どちらとも言えない ④そう思う ⑤強くそう思う
Q11	教員の熱意	授業に対する教員の熱意を感じた。 ①全くそう思わない ②そう思わない ③どちらとも言えない ④そう思う ⑤強くそう思う
Q12	授業の進め方	教員は受講生の反応を確かめながら授業を進めていた。 ①全くそう思わない ②そう思わない ③どちらとも言えない ④そう思う ⑤強くそう思う
Q13	授業の進度	授業の進度は適切であった。 ①全くそう思わない ②そう思わない ③どちらとも言えない ④そう思う ⑤強くそう思う ※「全くそう思わない」「そう思わない」を選んだ方は、授業の進度について、どのように感じましたか。①遅すぎる ②速すぎる
Q14	授業の難易度	授業の難易度は適切であった。 ①全くそう思わない ②そう思わない ③どちらとも言えない ④そう思う ⑤強くそう思う ※「全くそう思わない」「そう思わない」を選んだ方は、授業の難易度について、どのように感じましたか。①易しすぎる ②難しすぎる
Q15	工夫	この授業で工夫してほしいと思うものをすべて選んでください。(複数選択) ① 配付資料 ②板書 ③パワーポイント ④関連する情報や話題の提供 ⑤教員とのコミュニケーション ⑥受講生同士のコミュニケーション ⑦テキストや教材の選定 ⑧教室等施設条件 ⑨開講する曜日・時限 ⑩私語への対応 ⑪特になし ⑫その他
Q16	知的好奇心刺激	この授業を受けて知的好奇心を刺激された。 ①全くそう思わない ②そう思わない ③どちらとも言えない ④そう思う ⑤強くそう思う
Q17	他者への推薦	友人や後輩に推薦できるような授業内容であった。 ①全くそう思わない ②そう思わない ③どちらとも言えない ④そう思う ⑤強くそう思う
Q18	知識・能力の高まり	この授業を受けて知識が深まり、あるいは能力が高まった。 ①全くそう思わない ②そう思わない ③どちらとも言えない ④そう思う ⑤強くそう思う
Q19	総合的判断	総合的に判断してこの授業は意義のあるものであった。 ①全くそう思わない ②そう思わない ③どちらとも言えない ④そう思う ⑤強くそう思う
Q20	担任者提示項目	担任者が示す質問に関して、5段階で評価し、該当する番号にマークしてください。 ①全くそう思わない ②そう思わない ③どちらとも言えない ④そう思う ⑤強くそう思う



付表2 授業アンケート(新アンケート)の区分、質問項目および選択肢(数量化数値)

項目番号	区分	質問項目と選択肢
Q1	進度	あなたにとってこの授業の進度は適切でしたか。 <sup>a)</sup> ①遅い(1) ②やや遅い(3) ③適切(5) ④やや速い(3) ⑤速い(1)
Q2	難易度	あなたにとってこの授業の難易度は適切でしたか。 <sup>a)</sup> ①易しい(1) ②やや易しい(3) ③適切(5) ④やや難しい(3) ⑤難しい(1)
Q3	シラバスとの整合性	授業はシラバス(授業概要、到達目標、授業計画)に沿って行われましたか。 <sup>b)</sup> ①行われた(5) ②ある程度行われた(4) ③どちらともいえない(3) ④あまり行われなかった(2) ⑤行われなかった(1) ⑥シラバスを見ていない(1)
Q4	理解度の確認	担任者は、受講生の理解度を確かめながら授業を進めていましたか。 <sup>b)</sup> ①進めていた(5) ②ある程度進めていた(4) ③どちらともいえない(3) ④あまり進めていなかった(2) ⑤進めていなかった(1)
Q5	改善のポイント	この授業で工夫してほしいと思うものをすべて選んでください。(複数選択) <sup>c)</sup> ①シラバス ②授業計画 ③配付教材 ④授業中の環境 ⑤説明の仕方 ⑥提示の仕方(板書やパワーポイントなど) ⑦授業内容 ⑧時間外学習の支援 ⑨学生への接し方 ⑩課題のフィードバック ⑪特になし
Q6	学修時間	予習復習、準備、課題のために、授業1回あたり平均してどの程度授業時間以外に費やしましたか。 ①予習・復習を全くしなかった(1) ②30分未満(2) ③30分～1時間未満(3) ④1～2時間未満(4) ⑤2～3時間未満(5) ⑥3時間以上(6)
Q7	意欲的学び	この授業について意欲的に取り組みましたか。 <sup>b)</sup> ①意欲的に取り組んだ(5) ②ある程度意欲的に取り組んだ(4) ③どちらともいえない(3) ④あまり意欲的に取り組んでいない(2) ⑤意欲的に取り組んでいない(1)
Q8	到達目標の達成度	あなたは、この授業の到達目標をどの程度達成しましたか。 <sup>b)</sup> ①達成できた(5) ②ある程度達成できた(4) ③あまり達成できなかった(3) ④達成できなかった(2) ⑤到達目標を知らない(1)
Q9	総合判断	総合的に判断して、この授業は意義のあるものでしたか。 <sup>b)</sup> ①意義のあるものだった(5) ②ある程度意義のあるものだった(4) ③どちらともいえない(3) ④あまり意義あるものでなかった(2) ⑤意義のあるものでなかった(1)
Q10	担任者提示項目	担任者が示す質問に対して5段階で評価してください。 <sup>b)</sup> ①そう思う(5) ②ややそう思う(4) ③どちらともいえない(3) ④あまりそう思わない(2) ⑤そう思わない(1)

Note. <sup>a)</sup>③を選択すると5となり、5に近いほど適切であることを示す。<sup>b)</sup>逆転項目 <sup>c)</sup>選択された場合1、選択されない場合は0とする。

付表3 教育開発支援センター（CTL）委員会 委員と事務局の構成員

所 属	氏 名	
法学部	池田 慎太郎	
文学部	大久保 朝憲	
経済学部	座主 祥伸	
商学部	木村 麻子	
社会学部	保田 時男	
政策創造学部	森田 崇雄	
外国語学部	井上 典子	
人間健康学部	小室 弘毅	
総合情報学部	久保田 真弓	
社会安全学部	高鳥毛 敏雄	
システム理工学部	松本 亮介	
環境都市工学部	豊田 政弘	
化学生命工学部	池田 勝彦	
社会学部	関口理久子	委員長
教育推進部	三浦 真琴	副委員長
教育推進部	森 朋子	
教育推進部	山本 敏幸	
教育推進部	岩崎 千晶	
授業支援グループ	山本 圭一	
授業支援グループ	岡本 芳知	事務局
授業支援グループ	川瀬 友太	事務局